

## 特集：ハンス・ヨナスと生命倫理の行方 (ウィリアム・ラフルーア教授追悼)

### まえがき

杉村靖彦

ペンシルヴェニア大学の教授であったウィリアム・ラフルーア氏は、2010年2月26日、突然の心臓発作により、73年の生涯を閉じた。そのほぼ1年前、2009年2月21日に、京大宗教学研究室では、来日中であったラフルーア教授を迎えて講演会を開催した。「アメリカでの周縁的地位—哲学者・生命倫理学者としてのハンス・ヨナス (Peripherized in America: Hans Jonas as Philosopher and Bioethicist)」と題されたこの講演は、教授が晩年に情熱を注いだヨナス研究のエッセンスを平明な表現で生き生きと描くものであった。当日は、鳥取大学の安藤泰至氏と関西大学の品川哲彦氏にコメンテーターをお願いし、安藤氏にはおもに生命倫理の側から、品川氏にはヨナス研究の側から、示唆的なコメントと鋭利な質問を頂くことができた。両氏との質疑応答でも、その後のフロアとのやりとりや懇親会で続けられた議論の際にも、人格の底からの善良さを感じさせる温かな笑顔で、しかし進むような情熱をもってご自身の考えを語るラフルーア氏の姿は、同席した者たちに忘れ難い印象を残した。

ラフルーア氏のお仕事の中心は、日本の中世から近代にかけての宗教思想・倫理思想である。西行に関する研究 (*Mirror of the Moon* (1978), *Awesome Nightfall* (2003))、日本仏教に関する研究 (*Dogen Studies* (1985), *Buddhism in Cultural Perspective* (1988)) は、日米双方で高い評価を受けている。京大宗教学との関係では、阿部正雄の英語論文の編者としての仕事 (*Zen and Western Thought. Essays by Masao Abe* (1985)) も重要である。また、『戦後日本の精神史』(岩波書店)に収められた論考「廢墟に立つ理性—戦後合理性論争における和辻哲郎の位相」によって、氏は1989年に第一回和辻哲郎文化賞を授与された。その後、氏は水子供養を手がかりにして日本における中絶の位置づけを文化史的に究明する力作 *Liquid Life* (1992)を發表した。この著作は2006年に邦訳され、『水子—“中絶”をめぐる日本文化の底流 (青木書店)』、わが国でも多くの読者を得た。これと並行して、氏は日本の生命倫理学の動向に強い関心を寄せ、そこでの議論を丹念にサーベイしてその独自性を際立たせると同時に、そこから得た洞察を武器にアメリカの生命倫理学の偏向を批判するという仕事を

進めてきた。そうした研究の延長線上にあるのが、東大宗教学の島藺進氏らとの国際的な共同研究の成果である編著『悪夢の医療史—人体実験・軍事技術・先端生命科学—』（勁草書房）である。2008年に出たこの編著が、ラフルーア氏の最後のまとまった仕事となった。

このように日本でもその名がよく知られ、また多くの日本人研究者と密接に交流しながら研究を進めてきたラフルーア氏であるが、その中で氏のハンス・ヨナスに関する仕事がどのような意義と必然性をもつものであったかは、まだ十分に理解されていないように思われる。しかし、つねにいくつもの主題と分野にまたがって研究を進めてきたこの驚くべき知的体力の持ち主にとって、ヨナスへの関心は周縁的なエピソードでしかなかったわけではない。それどころか、日米の生命倫理学への氏の独自の関わり方は、ヨナス哲学に対する氏の関係を抜きにしては理解できないものであると思われる。

そもそも、ラフルーア氏がヨナスの思想を知るようになったのは、日本の生命倫理学を経由してのことであった。1999年に一年間日本で教えた際、氏は日本の生命倫理学の歴史を辿り直すなかで、この分野の泰斗である加藤尚武氏の著作『バイオエシックスとは何か』（未来社、1986年）を手にとった。そこで初めて、氏は『グノーシスの宗教』の著者ハンス・ヨナスが、その後半生において、独自の生命哲学と未来世代への責任を核とする倫理学を構築しつつ、ごく早い時期から臓器移植や脳死の問題に関して原理的な批判を繰り広げていたことを知った。その後、氏は日本でのヨナス受容についての組織的な研究を進めるとともに、ヨナスの哲学それ自体への関心を深めていったが、その際にもつねに氏の念頭にあったのは、なぜ、日本では生命倫理学の草創期からヨナスが盛んにとり上げられてきたのに対して、アメリカの生命倫理学ではヨナスの存在が周縁化され、忘れ去られたも同然になってしまったのか、という問いであった。

おそらく、臓器移植や脳死の問題に関する日本での批判的言説の独自性とヨナス受容の活発さとをかなりダイレクトに結びつけるラフルーア氏の見解に対しては、さまざまなレベルで異論が生じうるであろう。だが、日米の生命倫理学とヨナス思想の三者をたがいに連関づけて論じ、それぞれの極において十分に自覚されていなかった問題を掘り起こしていくという作業は、氏を措いては他の誰もなしえなかった仕事であり、開拓されるべき多くの可能性を秘めたものであることは疑いあるまい。このような仕事は、生死をめぐる原理的な問いから遠ざかっていく一方である生命倫理学に対しても、あるいは、生命倫理的な具体的問題へのヨナスの関わりを度外視してその哲学的思弁とユダヤ的背景へと関心を向ける傾向が強くなってきたヨナス研究に対しても、貴重な示唆と反省の材料を与えてくれるはずである。実際、講演会の際の安藤氏と品川氏によるコメントと質疑応答での発言は、ラフルーア氏への批判や異論をさまざまな形で織り込みつつも、氏の問題提起に触発されて思索をさらに遠くまで展開しようとする、クリエイティブな応答というべきものであった。

以上のように考えて、本号では、ラフルーア氏への追悼の意味を込めた小特集を企画し、

2009年の講演会での原稿を掲載することにした。同時に、安藤氏と品川氏にも、当日のコメントをもとにした原稿を寄せて下さるようお願いした。これに対して、安藤氏は講演会の際のコメントに本格的な加筆修正を施すという形で、また品川氏の方は、当日のコメントを文章化した原稿に加えて、ラフルーア氏が別のところで発表したヨナスに関する論文を批判的に考察した論考を用意するという形で、それぞれ見事に応えて下さった(なお、品川氏の二種類のテキストは、相互の独立性を考慮して別々に掲載してある)。大変お忙しい中、今回の特集の趣旨に賛同し、多大なご協力をいただいた両氏に、この場を借りて心からお礼申し上げたい。

なお、ラフルーア氏の原稿は、原文をそのまま掲載することにした。この原稿と内容的に重複するものはすでに別の場所で発表されているが、この版自体は公刊されないままで終わる可能性もあることを考え、記録を残すという意味でこのような措置をとった次第である。翻訳も用意できれば良かったのであるが、時間の関係でそこまで手が回らなかった。ご寛恕いただければ幸いである。ただ、非常に平明な英語で書かれているので、翻訳ではなく原文で読んでいただいた方がかえって話が伝わりやすいだろうという思いもあった。この原稿の掲載に関しては、奥様のラフルーア真理子氏にご許可をお願いし、ご快諾いただいた。ここであらためて感謝申し上げたい。